1

確かにこんな日はスポーツをしていた方が体に合っている。車から降りたち、サマージャケットを助手席に投げこんで思った。

頭の天辺から首すじ、肩、腕に日ざしを感じた。足元からじわじわと、反射熱で炒られている。サングラスのレンズを通すと、埋立地のグラウンドの間にのびるアスファルト道路は、溶けたホワイトチョコレートのようだ。

スポーツはダイビングかサーフィン、海に関係するものがいい、息をとめて、冷たい水にとびこむ一瞬を想像しながら、球音の響く金網の向こう側へと向かった。

暑苦しいユニフォームを着て、熱い地面を走るスポーツマン達に、それほど羨望は感じない。彼らにすれば、真夏の盛りに失踪人を捜し回る探偵は、立場をかわりたいと思う存在ではないはずなのに。

ダイヤモンドの手前でノックをしていた男が真っ先に僕に気づいた。年は四十前後、顔と腕は黒くやけている。うらやましいやけ方じゃない、水着になればくっきりとユニフォームの跡がついているはずだ。

そこまで考えて、何だか彼らをうらやましがるまいとしているような自分を感じた。

バットをおろした男は、帽子をずりあげ、額にへばりついた髪をかきあげた。

声が届く位置まで近づくと、帽子をとって首すじの汗をぬぐう。人の良さそうな小さな目が僕の上から下までを見つめた。

「中野さんは……？」

僕がいうと、男は幾度も頷いた。

「私です。佐久間、さんですか、早川法律事務所の……」

そうだ、と答えると驚いたようだった。

「失敬、どうぞ」

バットを他の選手に渡すと一塁側のベンチに誘った。グラウンドには彼と同じユニフォームを着た男たちが、十人程いる。腹がつき出ていたり、痩せていたり、四十を過ぎていそうなのもいれば、ようやく二十といった若いのまで、顔ぶれはさまざまだ。ユニフォームのチーム名は「城西ファイアーズ」と読めた。

ベンチの日陰に入ると、練習を見守っていた小柄なおばさんが、タオルを中野にさし出した。タオルで汗をぬぐうと、

「冷たい麦茶くれや」

おばさんにいう。
「はいよ」
紙コップの麦茶を僕も受け取った。
「どうも失敬しました。あの、実はあんたがあんまり――」
「若いので」
言葉を引き継ぐと、幾度も頷く。
「たいてい、テレビなんかで見る探偵さんてのは、刑事あがりの人が多いでしょ。だからつい、そんな人を想像しちまって」
僕は微笑した。
「慣れています」
「そりゃ良かった。いや、良かったってこともないか。私、この先の町で新聞販売店をやっとります」
「うかがいました」
あ、と首を頷かせて、急に中野は立ち上がった。
「キュウさん、何度いったらわかるんだよ！　体の正面でとるんだ、体の正面で！」
怒鳴られたのはショートを守っている、三十四、五の人なつこそうな男だった。のんびりとゴロを追いかけると、それを投げかえし、手を振って答える。
「すいません、どうもヘボ野球で」

「僕もチームに入っています」
「へえ？」
「早川法律事務所にはふたつチームがあるんですよ」
「ふたつも。弁護士さんのところにしちゃ、ずいぶん大きいですな」
「今度、試合をどうですか」
「いやいや、とんでもない」
大げさに手を振って、すぐ真顔になった。
「でも佐久間さんが、あいつを見つけてくれたら……」
「御依頼の方ですね」
「そうなんです。私個人の依頼というよりも、こりゃチーム全体で決めたことなんですわ。もうすぐリーグ戦の準決勝なんでね」
「チームの方ですか」
「ピッチャーですわ。それは、ほれぼれするような球、投げよります」
「そうすると、その方が居なくなった」
「ええ」
大きな溜息（ためいき）を紙コップに吹きこみ、中野はハイライトに手をのばした。
「私は草野球の監督をもう四年、選手時代も含めれば十年やっとりますが、あんな良い球放る奴は他に知りませんわ。たまに、元甲子園ちゅうのがおりますが、もう若かない連中

ばかりですからね。おまけにうちのチームは商店街のオヤジばかりで、マイナーリーグといっても、準決勝までこられたのは、あの男のおかげなんです」

「その方のお話をうかがいましょう」

「私ら、ランナーちゅう仇名をつけとりました。いつも、このグラウンドのすみっこで走っとりまして、半年程前ですか、私が声をかけてチームに入れたんです。二十か二十一ぐらいですか、はしっこい、運動神経の発達した男でしてね。野球はあんまりしたことはなかったらしいが、ちょっと教えるとめきめき上達しよりました……」

ランナーの本名は三杉純一、中野の販売店がある町の安アパートにひとりで暮らしていた。学生か浪人のようで、働いているという話を聞いた者はいない。無口だが、体を動かすことには真剣だったという。城西ファイアーズが週に一度練習をするこの埋立地で始終、走ったり、腕立てふせをして体を鍛えていた若者だった。

三杉純一をスカウトして入れてから、城西ファイアーズは常勝チームに変貌した。投げてよし、打ってよし、走ってよしの彼は城西ファイアーズのエースピッチャーになったのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。